

## 異動者からの一言

総務部総務課主査 遠藤龍彦

〒061-1433 恵庭市北柏木3丁目373番地

TEL 0123-32-2135, FAX 0123-34-7233

史学科卒業後、道立高校の歴史の教員、道立文書館の歴史資料を扱う専門職、知事部局の行政職を、それぞれ十年ほどずつ勤めてきた少々変わった経歴の持ち主ですが、よろしくお願ひします。

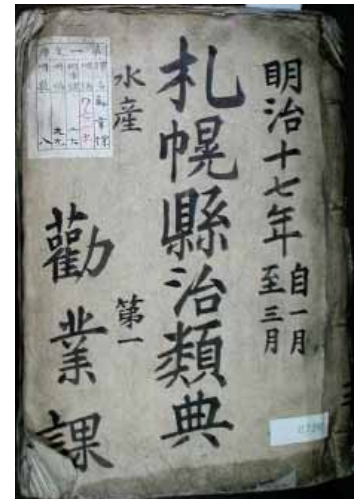
当场本館正面の階段の壁に、本道孵化事業の沿革と北海道庁初代の水産課長伊藤一隆の事績を記した大きなプレートが掲げてあって目を惹きます。伊藤は札幌農学校一期生ですが、二期生として有名な内村鑑三もまた卒業後すぐ水産行政に携わっていたことは、あまり知られていないようです。

当场の場長も勤められたことがある伊藤繁氏の著書『ほっかいどう漁業史再発見』に、道立文書館所蔵の公文書の中に内村の自筆による千歳川調査復命書が紹介されていたことを思い出し、原本を見てみました。開拓使の廃止後、北海道庁設置までの約4年間、北海道には札幌県、函館県、根室県が置かれていましたが、その札幌県の公文書を編纂した「札幌県治類典」の1冊がそれです(写真)。

明治15年12月に内村は札幌県勸業課の職員として同僚と共に、当時禁漁の一部解くべきか議論のあった千歳川上流の鮭産卵地を調査したのですが、アイヌの人たちが元のように鮭漁で食糧を確保できるようにすべきとの内村の復命書は伊藤氏の著書にも紹介されていますので、ここでは同僚の十川定道の復命書の中から、130年ほど前の千歳川での鮭の産卵の様子を記している原文を紹介します。なお、読みやすくするために常用漢字に改め、適宜句読点、濁点、改行、注を付しました。下線部は当時のアイヌ語の地名です。

客歳(昨年の意)十二月十八日千歳川鮭魚ノ産卵ヲ実見スルノ命ヲ受ク。就テ二十一日札幌ヲ発シ千歳ニ達ス。二十二・六日ノ間土人ヲ僦(やと)フテ川崖ヲ歩行シ、或ハ丸木舟ニ乗リテ水流ヲ上下ス。終始水中ヲ窺見スルニ、果シテ雌雄ノ鮭魚相互ニ游泳シテ、砂礫ヲ吻掘シ産卵ス。ショッキ、ルインノ間ヲ過ルトキ、群鮭驚躍シテ推知スベキナリ。ヌッパ、ランゴウシノ水流モ亦(また)産卵不鮮(すくなくならず)ショッキ、ルインハ急流ニシテ産卵多シ。故ニ産卵後ノ鮭八率(おおむ)ネ流緩ナルヌッパ、ランゴウシニ下リテ死スルモノ殊ニ夥(おびただ)シ。然(しか)レドモ千歳ヨリ上下共ニ多少ノ死鮭ヲ見ル。土人云フ、例年夏季死鮭ノ為ニ水流腐敗シテ、飲用ニ供スル能(あた)ハズ。今年ノ如キハ鮭魚夥シク浜来(そらい:浜=遡)スルガ故ニ、従テ死鮭モ亦多シ。夏季必ズ潜鮭ノ悪臭ヲ発スルハ最モ苛ナラント。

ピラッポヨリ末瀑(最下流の滝の意)下ノ間八産卵僅(わずか)ニシテ、鮭群泳ス。蓋シ(けだし=思うに)産卵地ヲ求メントシテ浜登スルモ、水底磐石岩磊(らい=石が重なり合っている様子)ニシテ、産卵スル処極テ稀ナリ、而シテ千歳ヨリ下流カマッカノ間モ亦ピラッポ上流ト同



北海道立文書館所蔵 簿書 8738

ジク鮭游泳スルモ、水底沙砂ニシテ産卵至テ稀ナリ。

長都沼(千歳と長沼の境に当時あった湿地帯)ニ達シテ亦群鮭浜泳ス。是石狩ヨリ上流ニ遊登シテ産卵セントスル鮭ナリ。聞ク、此处ニ捕獲スル所ノ鮭ハ皆腹中卵ヲ有セリト。オホイザン、ルインノ沿川ハ鮭卵水底ノ砂礫ヨリ露出ス。ミジオシ、トヒシリ、ランゴウシノ間、亦往々産卵紅色ヲ変ジテ卵円薄桃色トナリテ水中ヲ流動ス。是蓋シ産卵場狹隘ニシテ未(いま)ダ此川ニ浜来スル産卵鮭ニ充ス能ハザルガユヘナリ。

十二月一月ノ交ヲ産卵期トス。其(その)候浜登スル産卵鮭大約十八万尾、産卵地四里許(ばかり)間ニ産出ス。而シテ五月ノ頃卵自ラ孵化シテ一寸乃至(ないし)一寸五分ノ児魚トナリテ海ニ下降ス。親鮭浜来ノ多少アリト雖(いへど)モ孵化児魚ニ至テハ更ニ多少ヲ見ズト(=いつも多い)又親魚産卵後ハ淀澱(よどみの意)ニ死スルモノ十ノ九。流ヲ下リテ再ビ海ニ入ルモノ十ノ一ナリト。

(中略)

千歳ヨリ末瀑ニ至ル上流六里半許間ニ丸木舟ニ乗リテ遡往下来、水中ヲ蹄視スルニ、果シテ灘瀬ノ水底礫砂ノ処ニ産卵ス。其多ク産卵スル所湍畦(原文に「うね」とルビ)アリ、其少シク産卵スル所湍畦ナシ。駅(現在の千歳橋付近に置かれた駅通所のこと)下チヤウスペノ間、亦産卵ス。其最モ多ク産卵スル所ハ、ショッキ、ユナイシュツグンネ、オホイザン、ルインナリ。其多ク産卵スル所ハ、マス、ペシヤ、ランゴウシ、シカベト、イザンナリ。其僅ニ産卵スル所ハ、パカリ、ピラッポ、トヒシリ、マックチリ、ヌッパ、ナイブツ、チライハッタナリ。

之等(これら)ヲ合シテ其産卵スル処ヲ十七トナス。振り返リニ其ノ間ヲ里数ニ延(のべ)テ産卵地ヲ合縮セバ、其川ノ縦九間(約16m)横四里許ナリ。之ヲ千歳川鮭産卵場トス。

アイヌ語地名の位置は榊原正文『データベース アイヌ語地名3 石狩』巻末の千歳川流域図が参考になります。

(えんどうたつひこ:総務課主査)